

Title	ベエアー著 英国社会主義史第二巻
Sub Title	
Author	加田, 哲二
Publisher	慶應義塾理財学会
Publication year	1921
Jtitle	三田学会雑誌 (Keio journal of economics). Vol.15, No.1 (1921. 1) ,p.149- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	新刊紹介
Genre	Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00234610-19210101-0149

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

れども、資本主義勃興の時代であつて、其の下に於ける社會主義に類似した政治思想を述べたものであると云つてもいゝだらう。

第二の部分は一七六〇年より一八三四年迄の思想の發展を述べて居る。産業革命が惹起して、資本主義が隆盛の極點に達すると、こゝに勞働者の自覺を生じ、やがて反資本主義の萌芽となる。Ricardo 等の經濟學説が却つて社會改良の導火となり、偉大なる社會改良の實行者 Robert Owen の影響と相俟つて、次第に社會主義的傾向の色彩を濃くし、所謂 Chartist の運動となり、一八三五年 Municipal Reform Act が上下兩院の論題となり、勞働者の政治運動がやがて本來の Chartist の運動を起さんとするところに於て終りを告げて居る。従つて近世社會主義の英國に於ける状態を知らんと欲する者は第二巻を繙かなければならない。

本書は主として政治經濟等の實際運動よりも思想的背景に方を注いだ傾向がある。時代々々の代表的個人に就いて一々其の著述學説を紹介し、而も比較的統一されて居る點は蓋し著者の技術と云へるだらう。殊に各時代の社會思想を表現するのに巧みに興味ある文學的著作を引用したのは、兎もすると無味乾燥になり勝ちの此種の著作をして其の弊を免れしめた所以であらう。唯此の種の著述として止むを得ないこともかも知れないが、ある個人に對して、多少偏頗に省略したり、誇張したりしてあるやうに思へる。例へば Malthus に關する記述の如きは省略に過ぐる例證であらう。其の他社會主義の歴史として其の思想的萌芽を説明するに餘りに多くの頁數を費し過ぎはしないか。若し前提に是だけの頁數を費すのならば、Proper である第二巻が本書より僅かに五十頁の増加に過ぎないのは

少しく不當のやうに思へる。然し乍ら兎に角本書の如きは吾人日本人にとつて極めて有益な書物である。我が國の社會運動はある點に於いて、甚だ英國に類似して居る。本書の如きは此の意味に於いて吾人の踏み行く途を暗示して呉れるものである。著者が Preface に於いて本書の目的は實際問題の救濟藥を提供すると云ふよりも寧ろ社會、政治等の學徒を刺激するにあると云つて居るが、余は我が國の學徒が本書に依つて眞面目なる研究に刺激せられんことを希望する。(野村兼太郎)

ペーパー 英國社會主義史 第二卷

M. Beer:—A History of British Socialism

Vol. II. 15/—

ペーパー氏の英國社會主義史第二卷は千九百二十年を以てロンドンに出版された。その叙述

した所はチャーチズムの運動に初まつて千九百二十年に至る英國社會主義史である。故にこの書は近代社會主義運動の英國における主要な要素を全部包含してゐると云つていひのである。第一巻においてロバート・オーエン並にチャーチズムの誕生にその叙述の筆を擱いた著者は第二巻に至つてチャーチズムの運動を語ることに頗ぶる精細なるものがある。チャーチズムの勃興からその教義、その組織、その最盛期、その道徳的影響等百九十數頁に涉つて論述され、第二巻の一半たる第三部は全部チャーチズム運動の爲めに費されてゐる。

その第四部はチャーチズム運動以後の社會主義、即ちチャーチズムの熱烈なる運動の千八百四十八年に於ける潰滅から、勞働運動に溫和的傾向が齎らされ、産業界並に思想界に自由主義が跳梁跋扈した時代から、千八百八十年代にお

ける社會主義の復活の顛末を記し、更に集産主義と、之に反抗する諸主義を論じ、英國勞働黨の改造にその筆を擱いてゐる。

今、本書全體の價值について言へば、勿論英國社會主義の全體を記述したものとて貴重な文獻であると云ふより外はない。更にまた著者その人が、その書の序文に見えるやうに英國通であり、且つ獨逸文で既に先年英國社會主義史の著述のあることは、彼がこの書の著者として適任であることを物語るものである。然し第二卷全體の構成上その第三部たるチャーチズムの運動の餘りに詳細であつて、その第四部即ち千八百五十五年から千九百二十年に至るまでの社會主義學說並運動が、その第三部に比較して、餘りに簡略であることを遺憾とする。然し是は構成上の缺點であるが、更に私達の注意しなればならないことは、著者がマルクス主義者で

あることである。而して著者がマルクス主義者であることが著しくこの書に表はれてゐる點である。嘗て小泉教授は英國社會運動史に關する諸文獻を紹介批判して、ベアア氏が千九百十二年獨逸にて出版した *Geschichte des Sozialismus in England* に及び、この書の著者がマルクス主義であることを念頭に置いて、讀者はこの書を讀べきことを注意したことがある。(三田學會雜誌第十一卷第二號「英國社會運動史について」(上) 參照) この批評はまた彼の英國社會主義史第二卷についても言ふことが出來やうと思ふ。社會主義史上においてカアル・マルクスの名の重要であることは、こゝに贅言を要しない、またマルクスが千八百四十九年から千八百八十三年の死に至るまでロンドンに居住し、さうしてその社會主義運動に、社會主義學說に貢獻した事績を打ち消することは出來ない。けれども英國

におけるカアル・マルクスの影響は極めて少數なる外國亡命客と、ハインドマンを通じて少數な英國人に限られてゐたと云ふことは多數の社會主義運動史家の認める所である。然るにベアア氏はマルクス並にその學徒たるハインドマン一派の社會民主主義同盟の學說並に運動に關して、英國特有の社會主義であるフェビヤン社會主義、ギルド社會主義に關してよりも、より多くの頁數を費してゐる。このことは著者がマルキストであつて、マルクス主義過重視の弊に陥つたものであらうと思はれる點である。

然し、一國における一運動の全般の歴史を書くことは極めて難事たるを失はない。かゝる難事業を遂行したと云ふ點のみでも、その見方の偏してゐる位のことでは黙過すべきことであらうと思はれる。ウェップ氏の「英國における社會主義」その他一二の英國社會主義史を讀まれた人

は更らにベアア氏の著書を繙くことによつて、英國社會運動に關してより廣汎な知識を得ることが出來るであらう。(加田哲二)

小島昌太郎著「海運經濟論第一卷」

京都弘文堂發行
定價 金 五圓

本書は小島助教が京都帝國大學經濟學部に於ける講義を整理増訂して公にしたもので、今後幾年かの間に完成すべき海運經濟論の一部をなすものである。全卷三百八十餘頁を緒論と船舶論とに宛て、分つて緒論を三章、船舶論を五章とする。今その大要を紹介すると、緒論の第一章「國民經濟と海運」に於て先づ一般的説明として古代及び現代に於て海運の重要視せられし又はせらるゝ所以、國際貿易補助の機關として海運の重要なる所以、海運獨立の必要ある所